国立国語研究所学術情報リポジトリ

「全然」の“迷信”に関する通言語的考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002749

「全然」の“迷信”に関する通言語的考察

橋本行洋

はじめに

日本語における漢語副詞「全然」については、大正末から昭和にかけて否定との結びつきが強まり、そこから昭和戦後に至って「否定と呼応しなければならない」という、いわゆる“迷信”の生じたことが知られている⁽¹⁾。

本稿では、語の用法変化とそれに伴う“迷信”とも言うべき意識が、日本語と中国語の同形語において同様に生じていることを観察し、これを通言語的に捉えうる現象であることを示す。

1. 中国語にもある「全然」の“迷信”

日本語と同様に、現代中国語においても「全然」は多く否定表現に用いられ、現行の中日辞典には、「否定文に用いる」（東方書店、北京・商務印書館共編『東方中国語辞典』東方書店 2004 年／松岡榮志他編『超級クラウン中日辞典』三省堂 2008 年）、「否定の副詞として用いられる」（愛知大学中日大辞典編纂所『中日大辞典』第 3 版、大修館書店 2010 年）と注記するものがある。一方、中国における主要な現代中国語辞典類には、

- 全然** 意思和“全”基本一樣，但用法不完全相同，一是只用于書面語，二是多修飾否定形式。例如：①9 農民的[・]眼睛，[・]全然[▽]没有[▽]錯的。誰个劣，誰个最甚，誰个稍次，誰个恁[・]弁[・]要[・]嚴，誰个[・]処[・]罰[・]從[・]輕，農民都有極明白的[・]計[・]算，罰[・]不[・]當[・]罪[・]的[・]極[・]少。（《毛澤東選集》17）
②0 他只是[・]搖[・]頭；臉[・]上[・]雖[・]然[・]刻[・]多[・]趨[・]紋，却[・]全[・]然[・]不[・]動[・]彷彿[・]石[・]像[・]一般。（《魯迅全集》一卷 68-69）
（北京大學中文系 1955 1957 級語言班編『現代漢語虛詞例釋』商務印書館 1982 年）

- 【**全然**】**quánrán** **副** 完全地（多用于否定式）：他一切為了集体，～不考慮个人的得失。（中国社会科学院語言研究所詞典編纂室編『現代漢語詞典』第 6 版、商務印書館 2012 年）

等とあって、これらでは断定を避けた表現が用いられているが、

- 全然** **quánrán** [副] 完全；全都：～不了解情況 | ～不計后果 | 為了保護国家財產，～不顧个人安危。【**注意**】“全然”只能用于否定，如“全然不考慮个人得失”，不能用肯定，不能說“全然考慮个人得失”。（商務印書館辭書研究中心編『應用漢語詞典』商務印書館 2000 年）

のように、肯定表現での使用はできないと注記する辞書もある。しかし実際には肯定表現

に用いられることもあり、たとえば『人民日報』（《人民網》<http://search.people.com.cn/>による）を検索しても、

○縱使当初思前想后、發誓丁克一輩子的人，一旦看到孩子出生時的面龐，全然是種種幸福弥漫。（「春節回家，你怕父母催生嗎（民生觀）」2014年1月24日）

○祁又一的《探宝記》，…中略…揭示了当下社会的人們因耽于物欲的无尽追求，全然把人自身的價值与意義抛之腦后的現實。（「2013年，長篇小說變招為哪般？（文學新觀察）」2014年1月10日）

○在樹下凝思，又從樹下離去。那一刻，我全然傾心動情了，真想回頭對白梅樹說一句什麼話。（「武夷白梅」2013年12月11日）

のような例を容易に見出すことができる。『応用漢語詞典』が不可とする「全然考慮～」という例も、

○写忠誠、為人民，強基礎、求發展，謀創新、真作為，樹形象、争排頭。…中略…二十四个字簡要、明了，將司法行政工作的政治性、法律性、社会性、服務性全然考慮進去。

（「[江蘇省泰州市]海陵區司法局“新時期海陵司法行政精神”候選項」2013年1月11日

http://sfj.tzhl.gov.cn/art/2013/1/11/art_3737_188748.html）

のように使用されることがある。

考えてみれば、『応用漢語詞典』が「全然」について、敢えて【注意】と断ったうえで「否定のみに用いることができ、肯定に用いることはできない」と記すのは、上掲のような肯定表現に用いられる例がしばしば見られ、それが“本来とは異なる誤った用法”と判断されたためであろう。その点においてこれは、日本語の「全然」における場合と同様の“迷信”に相当するものと言うことができる。

2. 『朱子語類』の「全然」

『大漢和辞典』および『漢語大詞典』には、「全然」の古い例として次のものが掲げられている⁽²⁾。

○出而謂列子曰、幸矣、子之先生遇我也、有瘳矣、全然有生矣、（『莊子』応帝王）

この箇所は『列子』に「灰然有生矣」とあって異同が存するが、『莊子』の「全然」についてみればこれは肯定表現に用いられているということになる。ただし、古い時代の「全然」には未だまとまった数の例が見られず、用法の偏りを考察することはできない。

「全然」が比較的多く認められる早い時期の文献としては、宋代、朱熹と門弟たちとの問答を記録した『朱子語類』があるが、これに関する言及として次の考察がある（文中の書名略号は次の通り：《変文》＝《敦煌変文集》、《語類》＝《朱子語類》、《平話》＝《新編五代史平話》、《金》＝《金瓶梅詞話》）。

○強調の語氣副詞，只能用于否定句，也就是說，它們只能修飾否定形式，表示對否定的

強調。…中略… 到近代漢語中，“了”基本上不再用作語氣副詞，但修飾否定形式的副詞明顯地增多了。《變文》中有“並、殊”；《語類》中有“並、初、斷、絕”，另外還有“決、全、全然、殊”也多修飾否定形式，很少修飾肯定形式；《平話》中有“初、斷、絕、了、全、殊”；《金》中有“白、並、斷、斷然、通、又、再”。…中略… 這些修飾否定形式的語氣副詞，有的是非常嚴格地只修飾否定形式，如“並、初、又、再、白”有些則偶爾可以修飾肯定形式，如“斷、斷然、絕、決、全、全然、殊、通”等。

(楊榮祥(2005)pp.370-371))

ここでは、『朱子語類』における強調の副詞としての「全然」は「決」「全」「殊」と同様、多く否定形式の修飾に用いられ、稀に肯定形式の修飾にも使用されると述べられている。その確認のため、『朱子語類』中に認められる「全然」の用例を次表に掲げる（「頁」は中華書局理學叢書版『朱子語類』（1994）の頁を示す⁽³⁾）。

【表 1】『朱子語類』「全然」

	用例	卷次・標目	頁	用法
1	全然守在這裏、不得動。	3・鬼神	41	否定
2	到夜全然收斂、無些形越時、便是智。	6・性理三	111	否的
3	那紙上説成、全然靠不得。	9・学三	152	否定
4	全然虚心、只把他道理自看其是非。	11・学五	180	否的
5	全然把一己私意去看聖賢之書、	11・学五	180	肯定
6	初間只争些小、到後來全然只有一邊。	13・学七	233	否的
7	意誠、便全然在天理上行。	16・大学三	341	肯定
8	但著實行処全然欠闕了。	22・論語四	531	否的
9	是不是全然不為。	23・論語五	537	否定
10	他聽之全然似不曉底。	24・論語六	568	否定
11	亦不是全然無所作為也。	25・論語七	629	否定
12	全然盛水不得。	27・論語九	673	否定
13	全然閉塞隔絕了。	27・論語九	690	否的
14	便是全然無了這些子心。	28・論語十	724	否定
15	且看来日月至与全然別、	31・論語十三	791	否的
16	又不能遵守齊之初政、却全然變易了、	33・論語十五	829	否的
17	便是全然不是、	34・論語十六	858	否定
18	改過則是十分不好、全然要改。	34・論語十六	859	否的
19	却是權与經全然相反；	37・論語十九	991	否的
20	若曾子之学、却与曾点全然相反。	40・論語二十二	1031	否的
21	如此問、乃見公全然不用工夫。	44・論語二十六	1146	否定
22	見得聖人所以孝其親者、全然都是天理、	58・孟子八	1357	肯定

23	不聞不見、全然無形迹、暗昧不可得知。	62・中庸一	1503	否定
24	今日は秋、為変到那全然天涼、	74・易十	1887	肯定
25	見得古注全然錯。	78・尚書一	1986	否的
26	全然不合。	79・尚書二	2026	否定
27	到第二章已下、又全然放寬、	80・詩一	2065	肯定
28	更含蓄意思、全然不露。	80・詩一	2065	否定
29	如蟋蟀之序、全然鑿說、固不待言。	81・詩二	2111	否的
30	有読了後全然無事者、有得一二句喜者。	81・詩二	2115	否定
31	則全然反乎正矣。	81・詩二	2132	否的
32	若作刺厲王、全然不順。	81・詩二	2134	否定
33	全然不是、豈止有不是处。	83・春秋	2166	否定
34	如今全然没理会、	84・礼一	2188	否定
35	唯是五体新儀全然不是。	87・礼四	2266	否定
36	孔門学者、如子張全然務外、	93・孔孟周程張子	2355	否的
37	少看有功却多、泛泛然多者、全然無益。	95・程子之書一	2424	否定
38	全然做天底、也不得。	95・程子之書一	2440	否定
39	猪則全然蠢了。	98・張子之書一	2515	否的
40	而今人看文字、全然心粗。	104・朱子一	2621	否的
41	当時曾無玷陳君举之徒全然不曉、	107・朱子四	2662	否定
42	如今全然無此意、如何恁地。	109・朱子六	2701	否定
43	如今宰相思量得一辺、便全然掉卻那一辺。	112・朱子九	2733	否的
44	近却尽去得前病、又覺全然安了、	113・朱子十	2749	肯定
45	何況慢慢地、便全然是空。	114・朱子十一	2759	否的
46	全然与所知者相反。	114・朱子十一	2763	否的
47	乃是行上全然欠耳。	114・朱子十一	2763	否的
48	所以全然無益。	120・朱子十七	2884	否定
49	如說易、說甚性命、全然惡模樣。	120・朱子十七	2899	否的
50	今只是略略火面上燂得透、全然生硬	121・朱子十八	2920	否的
51	又有全然不要、	121・朱子十八	2944	否定
52	於義理上全然理会不得。	122・呂伯恭	2952	否定
53	及其再人、全然若無能、	131・本朝五	3155	否定
54	匡衡做得相業全然不是、	135・歷代二	3229	否定

これを見ると、否定語（「不」「無」）と共起するもの（＝用法欄に「否定」と表示）は、54例中26例（48.1%）で半数に満たない。ただし、「別」「反」「錯」「欠」「悪」あるいは「収斂（消えて無くなる）」「蠢（愚かである）」「心粗（そそっかしい）」「生硬」等の、打消ないし否定的要素の認められる語を伴う例（＝同じく「否的」と表示）を含めると大多数

(48例：88.9%)を占める。また上表では「肯定」としたが、5「全然把一己私意去看聖賢之書」、27「到第二章已下、又全然放寬」等、文脈から否定的ニュアンスを認めうる例を含めるならば、さらにその割合は高くなる。楊榮祥(2005)による指摘は、おそらくこれらを含めた結果に基づく判断と考えられる。

しかし一方で、楊榮祥(2005)が「有些則偶爾可以修飾肯定形式」とする通り、22「見得聖人所以孝其親者、全然都是天理」や44「近却尽去得前病、又覺全然安了」のような否定的ニュアンスを認めがたい文脈においても「全然」は用いられることがあった。

3. 明清白話小説の「全然」

『朱子語類』の言語は大略宋代の口語を反映するものと考えられるが、下って明清の口語で記された白話小説類においても「全然」はしばしば用いられている。以下【表2】に、比較的著名と思われるものを中心として、筆者の判断によって選択した文献における「全然」の用例⁽⁴⁾を掲げる。

【表2】明清白話小説「全然」

	用例	書名	用法		用例	書名	用法
1	全然無効	三国演義	否定	67	全然不知	醒世恆言	否定
2	全然不睬	三国演義	否定	68	全然不理	醒世恆言	否定
3	全然不出	三国演義	否定	69	全然不知	醒世恆言	否定
4	全然不顧	三国演義	否定	70	全然不応	醒世恆言	否定
5	全然不動	三国演義	否定	71	全然不睬	醒世恆言	否定
6	全然不懼	三国演義	否定	72	全然好了	醒世恆言	肯定
7	全然不退	三国演義	否定	73	全然不覺	醒世恆言	否定
8	全然無俗態	水滸全伝	否定	74	全然不以為意	初刻拍案驚奇	否定
9	全然不動	水滸全伝	否定	75	全然未保	初刻拍案驚奇	否定
10	全然不記得	水滸全伝	否定	76	全然未保	初刻拍案驚奇	否定
11	全然打聽不著	水滸全伝	否定	77	全然不像夢境	初刻拍案驚奇	否定
12	全然不慌	水滸全伝	否定	78	全然不以為意	二刻拍案驚奇	否定
13	全然不懼	水滸全伝	否定	79	全然未保	二刻拍案驚奇	否定
14	全然不知	水滸全伝	否定	80	全然露著	二刻拍案驚奇	肯定
15	全然不懼	西遊記	否定	81	全然不理	二刻拍案驚奇	否定
16	全然没有	西遊記	否定	82	全然無異	二刻拍案驚奇	否定
17	全然不怕	西遊記	否定	83	全然無人認得	二刻拍案驚奇	否定
18	全然不知下落	西遊記	否定	84	全然不怕	三遂平妖伝	否定
19	全然無懼	西遊記	否定	85	全然不動	三遂平妖伝	否定

20	全然压倒	西遊記	肯定	86	全然未保	三遂平妖伝	否定
21	全然不見	西遊記	否定	87	全然不動	三遂平妖伝	否定
22	全然不懼	西遊記	否定	88	全然不覺	三遂平妖伝	否定
23	全然不見	西遊記	否定	89	全然像個人手	三遂平妖伝	肯定
24	全然不懼	西遊記	否定	90	全然不睬	三遂平妖伝	否定
25	全然無損	西遊記	否定	91	全然不曉	三遂平妖伝	否定
26	全然不理	封神演義	否定	92	全然没用	三遂平妖伝	否定
27	全然不知	封神演義	否定	93	全然不覺	三遂平妖伝	否定
28	全然不会壞動一角	封神演義	否定	94	全然失去	三遂平妖伝	否定
29	全然不理	封神演義	否定	95	全然不管	三遂平妖伝	否定
30	全然不理	封神演義	否定	96	全然不解其意	三遂平妖伝	否定
31	全然不理	封神演義	否定	97	全然不覺	三遂平妖伝	否定
32	全然不懼	封神演義	否定	98	全然不知	三遂平妖伝	否定
33	全然不省	喻世明言	否定	99	全然無異	三遂平妖伝	否定
34	全然未保	喻世明言	否定	100	全然不知	紅樓夢	否定
35	全然不解	喻世明言	否定	101	全然無一点兒能為	紅樓夢	否定
36	全然不校	喻世明言	否定	102	全然温習	紅樓夢	肯定
37	全然不懼	喻世明言	否定	103	全然明白	紅樓夢	肯定
38	全然未保	喻世明言	否定	104	全然没有	儒林外史	否定
39	全然不惜体面	喻世明言	否定	105	全然不解	儒林外史	否定
40	全然無懼	喻世明言	否定	106	全然不知	儒林外史	否定
41	全然不識一字	警世通言	否定	107	全然看不得	儒林外史	否定
42	全然不理	警世通言	否定	108	全然不知道	儒林外史	否定
43	全然又無些子消息	警世通言	否定	109	全然不問	儒林外史	否定
44	全然没事	警世通言	否定	110	全然不会制作礼樂	儒林外史	否定
45	全然未保	警世通言	否定	111	全然没有了	儒林外史	否定
46	全然不以為怪	警世通言	否定	112	全然是我來說的	儒林外史	肯定
47	全然未保	警世通言	否定	113	全然不喫	儒林外史	否定
48	全然不知家中之事	警世通言	否定	114	全然不知	儒林外史	否定
49	全然不濟	警世通言	否定	115	全然是火	女仙外史	肯定
50	全然不知	警世通言	否定	116	全然是金	女仙外史	肯定
51	全然不濟	醒世恆言	否定	117	全然不解其意	女仙外史	否定
52	全然不疑	醒世恆言	否定	118	全然不在他心上	女仙外史	否定
53	全然不改	醒世恆言	否定	119	全然布素	女仙外史	肯定
54	全然没了	醒世恆言	否定	120	全然不懼	女仙外史	否定
55	全然不拒	醒世恆言	否定	121	全然無心	女仙外史	否定

56	全然不動	醒世恆言	否定	122	全然不解	女仙外史	否定
57	全然不覺是女	醒世恆言	否定	123	全然不動	女仙外史	否定
58	全然没事了	醒世恆言	否定	124	全然不覺	女仙外史	否定
59	全然不知	醒世恆言	否定	125	全然覆没	女仙外史	肯定
60	全然無恙	醒世恆言	否定	126	全然風雅詩人	女仙外史	肯定
61	全然不理	醒世恆言	否定	127	全然不解	女仙外史	否定
62	全然未保	醒世恆言	否定	128	全然不懼	女仙外史	否定
63	全然未保	醒世恆言	否定	129	全然不知	女仙外史	否定
64	全然不理	醒世恆言	否定	130	全然不動	西湖佳話	否定
65	全然不理	醒世恆言	否定	131	全然不理	西湖佳話	否定
66	全然不睬	醒世恆言	否定	132	全然不疑了	西湖佳話	否定

この表から明らかなように、文献による差異はあるものの、ほとんどの例が「不」「無」「没」「未」という否定語を直後に伴っている（132例中120例：90.9%）。中には「全然不理」「全然未保」のように固定した言い回しと見られるものもあるが、いずれにしても「全然不～」「全然無～」等の否定表現における例がほとんどである。

やや粗い調査ではあるが、これにより「全然」が肯定表現との共起例を残しつつ、否定表現における使用に偏向する状況は認められよう。このような否定表現への極端な偏りのために、実際には否定と共起しない例が存していても、「全然」は必ず否定を伴わなくてはならない」という意識（＝“迷信”）が生じるようになったものと考えられる。

4. 用法の変化と“迷信”の発生

明清白話小説の「全」および「全然」が否定を伴う現象については、次の指摘がある。

○“全”は“全然”を含め、多く否定副詞を後にとる特徴をもっている。…中略…否定はそれだけで完結していて、それを強調する必要はないはずである。「私は中国人ではない」ということは、それだけで十分で、「まったく」とか「けっして」という強調を必要としない。否定はそれだけで全面的であるはずである。しかし、私たちは単に否定しただけでは不安を覚える。この「不安」を解消する一つの方法として、このような“全不…”“全然不…”という否定の強めが生まれる。この傾向は、吉川幸次郎氏⁵⁾によれば、六朝頃から多くなったということである。（香坂順一（1987）pp.239-240）

これは、主に否定表現の面からその強調に際しての「全」「全然」との共起を述べたものであるが、引用の冒頭部分にもあるように「全」「全然」の側から見れば、否定語を多く伴うということになる。なお「全」については、陳宝勤（2011:294-306）による後漢～清代の文献例を調査した報告がある。ここによればもと「完全（な）」という意味の形容詞であった「全」が、後漢の頃⁶⁾から「すべて」「まったく」という副詞として用いられるよ

うになり、近古後期（元～清）の文献において否定語に掛かる例が際だって多くなる⁽⁷⁾ことが観察される。

また副詞としての「決」は、「用在否定詞前面」（『現代漢語詞典』第6版）とあるように、現代中国語では専ら否定表現に用いられるが、楊榮祥(2005)は、

○像“決”在現代漢語中用作語氣副詞時，只修飾否定形式，但近代漢語中也可以修飾肯定形式。(p.69)

として、「今日見得義當為、決為之；利不可做、決定是不做」（『朱子語類』卷15）、「當時若能聽用、決須救得一半」（同、卷101）、「西門慶吩咐：那个小廝走漏消息。決打二十板」（『金瓶梅詞話』卷26）の例を掲げている。すなわち「決」は、日本語の「けっして」が、

○決^{けっ}して弟子の中に此くせ^{でし}ものあるには極^{からめ}れり。搦^{とつ}捕て渡せよと押^{をし}付て申渡せしを。（江島其磧『鬼一法眼虎の巻』卷四・三（1773年））

のごとく「確かに」の意味で肯定にも用いられたのと同様に、もと肯定否定両用であったものが次第に否定専用となり、現在に至っているのである。したがって、仮に現代語で「決有異言」「けっして異論がある」等と言うようなことがあれば中日両語ともに誤用ということになるが、過去の規準に従えば正用であり、これを誤りとするのは“迷信”ということになる。「全然」が〈否定と呼応しなくてはならない〉という“迷信”も、この延長線上に存する現象と言えるだろう。

5. 通言語的に見た“迷信”

もと肯定にも否定にも用いられた副詞が、否定を伴って否定強調に使われることが次第に多くなると、やがて「否定と呼応が正しい用法である」という意識が生じるようになる。その状況下で、旧用法を踏まえているか否かに関わりなく、特に若い世代などを中心に、否定と呼応しない使い方が目立つようになる⁽⁸⁾と、それを誤用として非難する動きが生じる。極端なものになると、

○しかし漱石も（肯定的な「全然」を^{筆者注}使っているのだから、というのはおかしい。

言葉の使い方をまちがえる作家はたくさんいて、ことに漱石は、おかしな当て字の名人である。（島野功緒(2001)p.211）

のように、旧用法の例まで“誤用”と決めつけてしまうものもある。

こうした、「全然」における用法変化とそこから生じる批判意識の類例は、否定と呼応するとされる副詞だけを取っても「全然」のほか「とても」⁽⁹⁾「断然」⁽¹⁰⁾などに見られる。これらは、部分的には相互に影響し合うこともあるかもしれないが、むしろ普遍的に生じる現象と考えられる。さらに同様の現象が中国語にも見られることを考慮すれば、これを言語類型論の問題として通言語的な視点から捉えることができるものと考えられる。

おわりに

以上、本稿では日本語と中国語における「全然」を中心に考察を行った⁽¹¹⁾が、認知論の立場から日本語の「全然」等と英語の“at all”等とを対比し、そこから非明示的な否定表現における類型論的分析を目指した考察に有光奈美(2002)および(2008)がある。なおその中で述べられる、「ひどく」「すごく」「大変な」等と“awfully”“terribly”“deadly”“bloody”等に共通に見られる「否定的価値から量・程度の甚だしさへ」についての言説(有光奈美(2008)pp.263-265)は、いわゆる「濁音減価意識」⁽¹²⁾に関連して、否定的価値(サマーザマ、ハレルーバレル等)と量・程度の甚だしさ(トントンードンドン、トロリードロリ等)が同じ原理で発生する現象に通じるものである。

もとより、すべての言語現象を通言語的に捉えることは控えなくてはならないが、同じ言語現象が、共時的および通時的に異なる言語間で、同じ原理により発生する可能性がある以上、言語類型論による視点は重要性を有するものと考えられる。

【注】

- (1) 新野直哉(2011)等を参照。なお同書にもある通り、“迷信”という表現は小池清治(1994)が用いたものである。
- (2) 「全然」には連体修飾の形容詞用法もあり、『漢語大詞典』には唐代の例が示されるが、本稿では副詞用法の例のみを考察対象とした。
- (3) 『朱子語類』の調査にあたっては、『諸子百家中国哲学書電子化計画』<http://ctext.org/zh> のデータベースを用い、理学叢書版『朱子語類』(中華書局 1994 年)によって確認を行った。
- (4) 『開放文学網』(<http://open-lit.com/>)、『中央研究院漢籍電子文獻』(hanji.sinica.edu.tw/) および『諸子百家中国哲学書電子化計画』(<http://ctext.org/zh>) 所収のデータベースによって検索を行った。
- (5) 次の指摘を指すものと考えられる。

○かく「すべて」という意味の言葉を、「不」「無」の上に添えて、全面的に否定する語法の起源は、非常に古いのでありまして、今日の中国語の「全不」「並不」「並沒有」という言い方は、一見近世に突如出現したもののように見えますが、実は決してそうではない。少くとも魏晉までははっきり遡ることが出来、また稀薄ながら漢以前にも遡り得るのであります。「尅」「威」「都」「全」「並」と、言葉こそ変わっておりますが、其の理は一つであります。(吉川幸次郎(1949)p.53)
- (6) 太田辰夫(1958)は「南北朝の頃から」(p.285)とする。
- (7) 陳宝勤(2011)ではこの点について明言されていないが、示された数値から明らかである。
- (8) これを〈Ⅰ 具体的意味での肯定否定両用→Ⅱ 否定の強調→Ⅲ 肯定の程度強調〉として典型的に捉えた研究に播磨桂子(1993)がある。
- (9) 「とても」については、坪内逍遙「所謂漢字制限の分析的批判」(1923 年)、芥川龍之介「澄江堂雜記」(1924 年)多くの言説のあることが既に知られている。
- (10) 「断然」については播磨桂子(1993)に言及があり、橋本行洋他(2013)においても考察を行った。
- (11) なお、中国語話者の立場から、現代における中日両語の「全然」に関する対照研究を行ったものに、葛金龍(1999)があるが、そこでも、「中国語の“全然”は日本語の“全然”のような肯定文でプラス意味合いの語と共起する用法がな」(p.27)いとされる。

【引用参考文献】

- 有光奈美(2002)「否定的文脈と否定極性項目に関する一考察—“not at all” vs. 「全然」を中心に—」(『言語学論集』8)
- 有光奈美(2008)「日英語の対比表現に見られる非明示的否定性と量・質・態度に関する変化のメカニズム」(児玉一宏・小山哲春編『言語と認知のメカニズム—山梨正明教授還暦記念論文集』ひつじ書房)
- 遠藤邦基(1977)「濁音減価意識—語頭の清濁を異にする二重語を中心に—」(『国語国文』(46)4)
- 太田辰夫(1958)『中国語歴史文法』江南書院*引用は朋友書店の新装再版(2013年)による
- 小池清治(1994)『日本語はどのような言語か』筑摩書房
- 香坂順一(1987)『《水滸》語彙の研究』光生館
- 島野功緒(2001)『誰もがうっかり見過ごす 誤用乱用テレビの日本語』講談社
- 新野直哉(2011)『現代日本語における進行中の変化の研究』ひつじ書房
- 橋本行洋・梅林博人・新野直哉・島田泰子・鳴海伸一(2013)「漢語副詞の受容と展開—〈漢語の和化〉と否定との呼応—」(『日本語学会 2013 年度秋季大会予稿集』日本語学会 [ブース発表資料])
- 吉川幸次郎(1938)「中国語における否定の強調」(1938年10月16日大阪懐徳堂における大阪漢学大会にての口述および12月典籍之研究社その記録*引用は『吉川幸次郎全集』第2巻、筑摩書(1968年)による。
- 陳宝勤(2011)『漢語詞彙的生成与变化』商務印書館
- 葛金龍(1999)「日中同形漢語副詞「全然」についての比較研究」(『愛媛国文と教育』(32))
- 楊榮祥(2005)『近代漢語副詞研究』商務印書館